

意外に近い、インドと湾岸産油国



野村総合研究所インド 社長 佐竹 繁春

筆者は2011年から2016年までサウジアラビアに赴任していた。その後日本への帰国・勤務を経て、2022年6月にインドに赴任した。物理的に近くなったこともあり、今でも頻繁に湾岸産油国には出入りしている。

湾岸産油国は、この10年で大きく変わった。

まずサウジアラビアだが、2013年に筆者が当時の「JCCME 駐在員レポート」に「妻たちのリヤド生活」と題して、妻目線での生活のあり様を寄稿した当時と比較すると、個人的に目を見張る大きな変化は以下のとおりである。

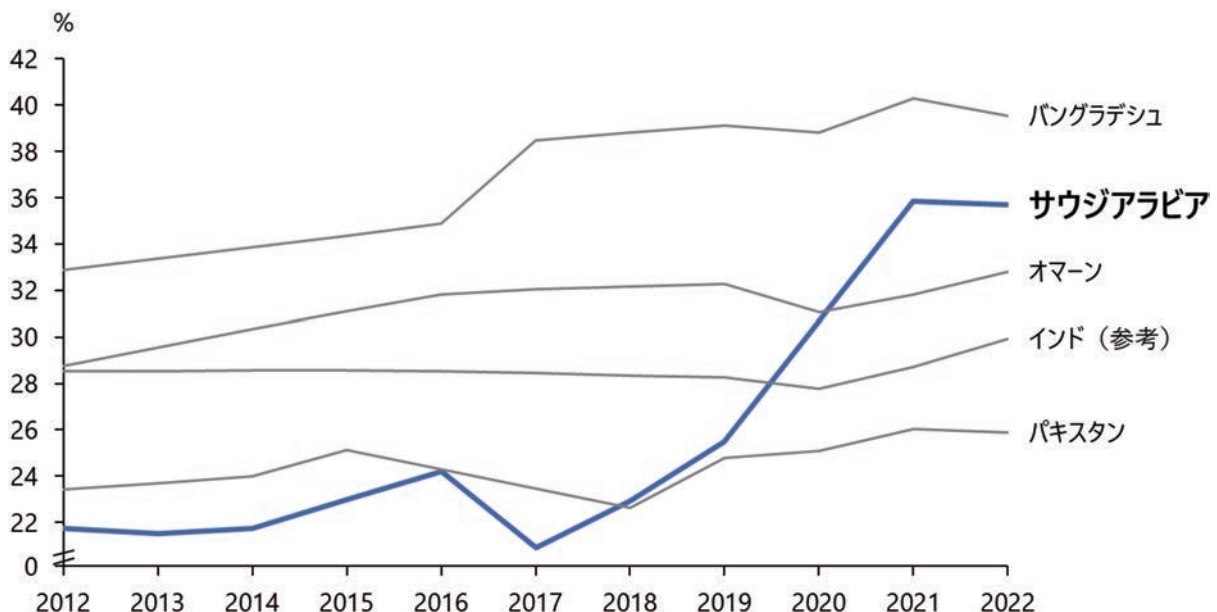
① 女性に対する宗教的な規制の緩和

具体的には、女性の運転が認められ、アバヤの着用義務はなくなり、女性の労働環境に関する規制も緩和された。お祈りの時間に閉店する義務もなくなり、この点も女性の生活をより柔軟なものにするのに一役買っているようだ。これらの結果、女性の社会進出率が急速に向上した（図表1）。

② 娯楽の多様化

大型ショッピングモールには、かつて禁止されていた映画館が設置されるようになった。「リヤド・シーズン」のような商業とエンターテインメントを合わせた複合施設や、「キッディーヤ」のような超大型のアミューズメントパークの開発も進んでいる。

図表1 サウジアラビアとイスラム諸国の女性の社会進出率



出所：世界銀行“World Development Indicators”より筆者作成

③ スタートアップの台頭

決済関連を中心とした Fintech 分野をはじめ、多様なスタートアップが台頭してきている。これも、10年前には見られなかった（あるいは、目立たなかった）動きである。

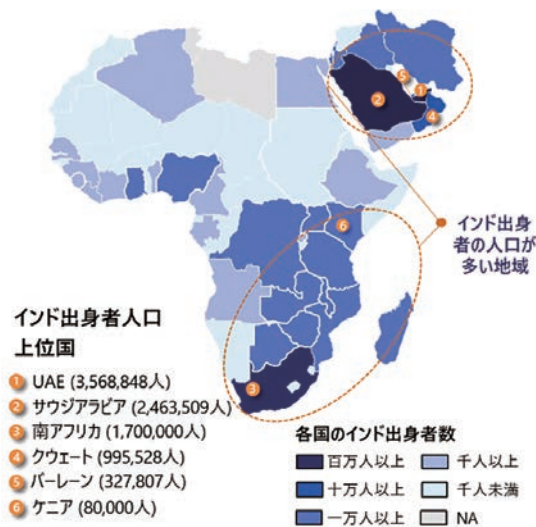
UAE（アラブ首長国連邦）も、サウジアラビアほどではないが変化がある。ドバイで Uber Green（エコ車両専用送迎サービス）を呼ぶと、特斯拉やメルセデスの電気自動車（EV）が迎えに来る。中国のEVメーカーである BYD も、トヨタ自動車と同じ Al Futtaim を代理店として本格展開を始めるなど、いつの間にか、EV 大国になりつつある。10年前には、湾岸産油国のような酷暑の環境では、電池の性能が十分に上がらないと言われていたことが嘘のようである。

以上のように、目に見える変化も多い中、変わらないものもある。その一つが、湾岸産油国におけるインド人材の活躍と、両国・地域の政府間・企業間の結びつきの強さである。特に後者は、昨年の G20 の前後から強化されている印象である。順にご紹介したい。

1. 湾岸産油国におけるインド人材「印僑」の活躍

外国で活躍するインド人達は「印僑」、英語では Non Residential Indians (NRI) と呼ばれる。湾岸産油国では印僑が多数活躍しており、UAE には350万人超、サウジアラビアにも250万人近くのインド人が出稼ぎ労働者として働いている（図表2）。

図表2 中東・アフリカにおける印僑の人口（2024年10月現在）



出所：Ministry of External Affairs India より筆者作成

筆者紹介

株式会社野村総合研究所に2002年に入社。2008年から日本・サウジアラビア産業協力タスクフォースにコンサルタントとして参画。2011年に中東協力センターに出向のうえ、サウジアラビアに赴任し、リヤドのビジネスサポートオフィス所長、ダンマン・ジャパンデスク代表を歴任。2016年に野村総合研究所に帰任し、プリンシパルを経てグローバル社会インフラグループマネージャーとして勤務。2022年6月にインドに赴任。2023年2月より現職。

専門は事業・政策の経済インパクト分析、インフラ輸出支援等の政策デザイン支援、主にインド・中東・中央アジアを目指す企業の海外進出支援と、関連する政府支援とのコーディネーション。

現在は200名規模の組織マネジメントの傍ら、日本企業のインド・中東・アフリカ展開や、在インド日本企業のデジタル化の支援等に注力している。

これらの印僑達は、かつてはいわゆる単純労働者中心であったが、今では技術職やホワイトカラーの専門職・管理職（いわゆる「番頭」）として、要職についている人材も多い。

ちなみにこうした印僑はアフリカにも多く、10万人から100万人を超える国もある。アフリカに分布する印僑は、いわゆる出稼ぎ労働者ではなく、東インド会社の時代からアフリカに住み着き現地人化したインド人達の子孫で、2世・3世が中心である。彼らの活躍も紐解くと面白いのだが、本旨からずれるのでここでは割愛する。

2. 政府間の結びつき

インドと湾岸産油国の政治外交関係は近年深化している印象である。2023年9月、ニューデリーで開催されたG20サミットでは、サウジアラビアのムハンマド・ビン・サルマン皇太子やアラブ首長国連邦（UAE）の指導者が訪印し、ナレンドラ・モディ首相と会談を行った。この会談では、エネルギー、安全保障、テクノロジー分野での協力が議論され、サウジアラビアとの「戦略的パートナーシップ評議会」の発足が発表された。また、ここで署名された米国主導のインドー中東ーヨーロッパ経済回廊（IMEC）計画も注目に値するものだ。

他にも、UAEとの間では、2022年に包括的経済連携協定（CEPA）が締結され、貿易・投資の促進が図られている。さらに、オマーンやカタールともエネルギーやインフラ分野での協力が進展しており、インドは湾岸地域において重要なパートナーとしての地位を確立しつつある。

3. ビジネスの結びつき

インドと湾岸産油国のビジネスの結びつきは、貿易・投資両面で拡大している。インドの湾岸産油国向け輸出は、精製石油製品、宝飾品、農産物、医薬品など多岐にわたる。また、L&T（ラーセン&トゥブロ）が、UAEとクウェートで電力関連プロジェクトを受注する等、湾岸産油国におけるインフラ開発にも参画している。逆に、湾岸産油国はインドにとって最大の原油供給源であり、特にUAEやサウジアラビアがその中核を担っている。石油製品以外にも、アルミニウムや化学製品といったインドの製造業に欠かせない原材料が輸入されている。

インドと湾岸諸国の間では、FDI（外国直接投資）も双方向で活発である。まず、インド企業は、湾岸産油国において、不動産開発、小売業、エンジニアリング、ITサービスなどの分野で進出している。例えば、インド人が経営するLuluグループは、UAEやサウジアラビアでショッピングモールやハイパーマーケットを展開しており、地域住民やインド人コミュニティの需要を取り込むことで、強固な地位を確立している。タタ・グループは、湾岸地域でホテル業やITサービスを展開しており、Taj Hotelsがドバイで運営する高級ホテルは湾岸諸国での観光需要を取り込んでいる。インドのIT大手であるInfosysやWiproは、湾岸諸国で企業や行政の業務のデジタル化プロジェクトを推進している。

次に、湾岸諸国からインドへの投資は、エネルギー、インフラ、再生可能エネルギーの分野を中心に進展している。代表例は、サウジアラムコとアブダビ国営石油会社ADNOCによるインドの製油所への投資や、石油精製を主力事業とするインドの大財閥であるリライアンス・インダストリーズへの大規模出資であり、石油化学分野での連携を進めている。この他、インフラ分野では、ドバイの港湾オペレーターであるDPワールドが、インド・グジャラート州の港湾プロジェクトに資本を投入し、港湾開発に参画している。自動車業

写真 インド・グルガオンで見られるエマール・プロパティーズのプロジェクト



出所：筆者撮影

界では、サウジアラビアの大手自動車代理店として著名なアブドゥル・ラティフ・ジャミール社が、インドの電動二輪・三輪製造大手の Greaves Electric Mobility 社への2.2億ドルの出資を発表した。不動産業界では、UAE（ドバイ首長国）の政府系デベロッパーであるエマール・プロパティーズ社が、インドで多数の商業・住宅複合開発プロジェクトに取り組んでいる（写真）。

おわりに

日本企業が湾岸産油国への展開あるいは拡大を目指す際、インドを活用する戦略は、選択肢に入ってくる。例えば、GEやシーメンスは、インドで製造したガスタービンや電力設備、鉄道機器などを湾岸諸国に供給しているし、こうした戦略をとる企業は欧米韓ならびに日本企業にも多く見られる。

この完成品の輸出戦略から一歩進んで、インドと湾岸産油国とをサプライチェーンでつなぎ、それぞれで付加価値を出していく戦略に進化させられれば、両国のビジネスにとってプラスになると考えられる。例えば、インドで部品やモジュールを製造あるいは調達して湾岸産油国に送り、現地で組み立てる等すれば、インドの安価な製造コストとインド国内における生産に対する政府インセンティブを享受しつつ稼働率も上げながら、湾岸産油国における現地生産に伴う関税の免除等湾岸産油国側からのインセンティブの適用も期待され、これらを通じて利益率が改善するのではないか。また、アフターサービスやメンテナンスの人員も、インドで教育して湾岸産油国に送る、あるいは教育担当者をインドから現地に送り、現地人社員を含む現地リソースを教育する等の取り組みを通じて、知識・ノウハウの断絶を防ぎ、サービス品質の向上にも貢献することが期待される。

インドと湾岸産油国の距離は、エネルギーだけでなく、印僑の存在、政治・外交的な結びつき、ならびに貿易・投資を通じて縮まりつつある。この動きを活用し、日本企業が両地域で競争力を高めることを期待したい。